

## 北信越支部

## 国際雪形研究会による第 14 回雪形ウォッチング報告

5 月 17, 18 日の 1 泊 2 日で国際雪形研究会および雪氷学会北信越支部主催の第 14 回雪形ウォッチングが中央アルプスと北アルプスの雪形を対象に開催されました。初日はやや薄曇でしたが暖かくて気持ちのいい天気でした。

参加者の多くは JR 松本駅に 12 時 30 分に集合し、51 名がバスに乗り込んで 12 時 40 分に松本駅西口ロータリーを出発しました。参加者の半数近くがはじめてなのでちょっと緊張気味です。松本 IC～駒ヶ根 IC までのバスの中でとりあえず簡単な自己紹介をしました。途中、雲が多くなってきて、雪形が見えるかどきどきしましたが、駒ヶ根 IC でいきなり「島田娘」が目に見え飛び込んできました。

ここで待っていてくれた中央アルプスの雪形達人の塩澤一郎さんが、早速、雪形「島田娘」を案内してくれました。雪形初心者が落ちこぼれないように雪形「島田娘」の特定作業をしっかり行いました。その後、ふるさとの丘公園に移動し、新潟、十日町、塩沢、甲府などから車で集合した 10 数名の参加者と合流し、山の全体を遠望しながら「島田娘」を堪能しました。

この後、白馬村にあるやや高級そうなホテルに向かい、入浴・散策タイムの後、18 時から遠藤八十一教祖のこざっぱりとした挨拶で夕食開始、そして 19 時 30 分からのミニシンポジウムへと流れていきました。総勢 69 名（うち中学生以下 10 名）の参加者はこのホテルにとってもかなり多かったようですが、幹事としても全員を把握するのに必死で、何を食べたかはよく覚えていません。

出入り自由、飲食・持ち込み自由、居眠り自由、喫煙不自由のゆるゆるのミニシンポジウムでは、北アルプスの雪形達人で翌日の案内人である渡邊逸雄さんの 10 分間の基調講演に始まり、持ち時間たった 5 分間の中で、雪形ウォッチング初参加者、2 回目参加者を中心に力の入った発表が相次ぎました。最前列のかぶりつきには小学生が陣

取って、平松和彦さん、小林俊市さんらの科学実験・体験・プレゼントに目を輝かせておりました。ナダレンジャーの弟子としてナダレンジャー 2 号の肩書きを持つ茨城県から 2 回目の参加になる小学 5 年生男子による雪崩の学術的な発表も参加者を驚かせていました。もちろん常連参加者による心地いい眠りに誘うような円熟味のある話芸？もすばらしいものでした。

このミニシンポジウムでは 17 件の学術および非学術講演があり、22 時 30 分から、雪形ウォッチング恒例の真夜中の花火大会をはさんで 24 時まで意見交換会が行われました。折角の温泉にもかかわらず、入浴する十分な時間もないまま、保護者の許可をもらった女子中学生 2 名を含む熱心な 20 名ほどが硬派な雪形学徒 3 名の部屋に集まり、ゆるめの分科会を 2 時ころまで続けました。

にもかかわらず、朝は、6 時からこれも雪形ウォッチング恒例の早朝サバメシ実習が執り行われ、主に小学生たちが元気よく参加し、数時間前に空いたばかりのビールの空き缶と牛乳パックを使い、30 分間ほどかけて、全員ふっくらサバメシを成功させていました。ちなみに、サバメシに鯖は入っておりません。内山庄一郎会員の開発によるサバイバルメシタキ、略してサバメシというものです。快晴、無風でしたのでとっても楽なサバメシ体験となりました。

朝食後、近くの教会の前での「エアー双眼鏡」を使っただけの怪しい雪形ウォッチングポーズ（写真）による記念撮影の後、北アルプス雪形ウォッチングバスは 6 台の車を引き連れて 8 時 10 分にホテルを出発しました。初日よりさらに気温が高く汗ばむほどですが、案内人の渡邊さんは、はじめからエンジン全開で休むことなく、北アルプス雪形案内芸を披露してくれました。

ちょっと長くなったので、はしょって、書きます。難解な「嫁岩」、「手斧」などの雪形では、認



写真 参加者の雪形ウォッチングポーズによる記念撮影

識の靄に包まれていた初心者の皆様も時間とともに何かが見えるようになり、終わるころには、複雑な山腹の残雪模様の中から、目的とする図形を見つけ出すことの感動を共感するようになっておりました。恐ろしいものです。トイレタイムで立ち寄った池田町立美術館で集合を呼びかけるために大声で叫んだ「国際雪形研究会の皆様！」が、まるで「くさい！雪形研究会の皆様」に聞こえたようで、雪形研究会子ども会（中学生以下）の皆様は大笑いしていましたが、確かに、こちらの方が笑えるかもしれません。

大町山岳博物館での昼食後、同館で開催中の雪形研究会会員の酒井英次画伯による雪形絵画展などを鑑賞し、13時10分、車参加者との1次解散、13時20分、信濃大町駅での2次解散、14時30分、長野駅での3次解散で69名の皆さんは日常の社会へと戻っていかれました。しかし、もしかしたらまだ社会復帰できずにこの辺をさまよっている方がいるかもしれません。

（独立行政法人 防災科学技術研究所 納口恭明）

（2008年6月2日受付）